

『最後の晚餐』

聖ヶ丘サテライトクリニック 院長 岡本 拓也



とある金曜日の午後、訪問診療の出先で携帯電話が鳴りました。サテライトクリニック事務の東出さんから。「先生、急な飛び込みなんですけどよろしいですか？うちには一度もかかったことのない患者さんです。たった今お電話があって、90代のお母様の状態が良くないので診に来てくれないだろうか、同居の息子さんからです。」

岡本：患者さんはどんな状態なの？

東出：昨日の朝から何も食べられてなくて、意識もないそうです。

岡本：救急車は呼ばないの？

東出：はい、救急車を呼んだ方がいいんじゃないですかと私も言ったんですが、息子さんはあまり病院に連れて行きたくはないと考えているみたいです。

岡本：うーん、どうなんだろうねえ…その感じだと、普通は救急車だと思うんだけど…。わかった、直接聞いてみないとよくわからないので僕から息子さんに電話して状況を聞いてみるね。電話番号、教えて。

ということで、息子さんに電話をかけてみました。聞けば、次のようなことでした。患者さんは40年近く独居で暮らしてきた。息子さんが足しげく様子を見に行っていたが、春頃から少しずつ弱ってきていた。しかし、一人暮らしの家を離れることは頑なに拒否。2日前に見に行ったら、失禁しソファに倒れていた。息子さんが介抱してなんとか自分の家に連れてきたら少し元気になり、一緒に

夕食を食べ、お休みと言って布団に入ったきりそのままずっと寝ている。クリニックに連絡があったのは、その翌日。

診に参りますと、深い昏睡状態。恐らく、息子さんの家に連れて来た日の夜に急な広範囲の脳梗塞が発症したのでしょう。余命は数日以内と判断しました。もはやこの年齢では回復の望みはなく、仮に持ち直したとしても長くはないでしょうし、元の状態に戻る可能性は0%です。もともと病院嫌いな人であり、自然な形で逝きたいと常々話されてもいたようです。息子さんも、このまま最後まで家で看てやりたいと考えています。

患者さんの状態を踏まえた上で息子さんの話をよく聴き、私はこう答えました。「わかりました。今病院に運んでもできることは限られています。確かに、病院に連れて行ってもお母さんが喜ぶようなことは一つもできません。最後までここにいさせてあげましょう。お母様もそれを望むでしょう。」

果たして患者さんは、翌日の未明に静かに息を引き取られました。とても安らかなお顔でした。それを見ている息子さんのお顔には、母親を亡くした寂しさ以上に、母親の願いを叶えてあげて、母親を最後まで家で看取ることができた達成感と安堵感がありました。亡くなる数日前まで望み通りの一人暮らしをし、最後に息子家族と一緒に食事をし、息子の家の布団に入って安心して眠り、そのまま彼岸に旅立たれたお母さんは、本当に幸せ者だと思ったことでした。